

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「支援員の先生方の1学期の振り返り」

- 子どもが発表したとき、先生からほめられたとき、すぐほめることで自信が付き、挙手も多くなってきた。
 - 時間を空けずにタイミングよく即時評価をすると、子どもはその気になります。子どもが行動を起こしたら、すぐ肯定的な評価（ほめる・認める・励ます・笑顔やジェスチャーで応える・感謝する）をすると、その行動は定着します。
- プラスの言葉掛け、子どもに響く言葉掛け、自己肯定感が高まるような言葉掛け、自分で気付くような言葉掛けを心掛けている。
 - 支援対象児は、注意を集中させて聞く力やワーキングメモリに弱さがあるため、伝わっていないことがあります。名前を呼ぶなど注意を促してから話す、個別にも指示を出す、指示を理解しているか確認する、視覚情報やオノマトペを活用するなど、伝えるではなく、伝わることを意識します。
 - 人は教えられたこと、嫌々やったことはすぐ忘れませんが、自分で気付いたことはなかなか忘れません。気付くとやる気はコインの表裏のような関係です。自分で気付く、だからやる気になります。これこそ学びの出発点です。自分で気付いて、やる気になった子どもの伸びしろは無限大です。子どもたちに知識を与えることも大切ですが、それ以上に自ら気付いて、やる気にさせることが最も大切です。
- 「学校が楽しい」と思える気持ちが続くよう、安心できる環境をつくりたい。
 - 子どもの問題行動は、個人と環境のミスマッチによって起こります。子ども一人一人に合った支援が得られる環境であれば、「学校が楽しい」と感じます。
 - 学校に多様な学習環境が用意されていて、子どもたちが自分の状態に合わせて環境を選べるようになれば、誰も学びやすくなります。
- 大人しく遠慮がちな子どもに、支援員は「困ったら遠慮なく呼べる人」と思ってもらえた。
 - 子どもは困ったときうれしいとき、必ず自分を見守ってくれている大人を期待して振り返ります。そのとき、「大丈夫だよ」と笑顔で言ってもらえると、真夏の冒険ができます。子どもが伸ばした手を握り返してください。
- 指導しても変容が見られない子どもに対して、どのような指導方法が有効か迷っている。
 - 最上位の目標（1年後のゴール）に対して、今できていること、少し頑張ればできそうなことを目標にして具体的な手立てを考えると一貫した指導が可能になります。指導に悩んだときは、子どもが達成可能なスモールゴールを設定してラストゴールを目指します。
- よい支援ができていないか、違う言葉の掛け方がよいのではないかと悩むことがある。
 - 支援の成果は、必ず子どもの表情や言動に表れるので、よく観察しましょう。うまくいっている支援は続けながら少しずつ減らしていきます。2回やってうまくいかなければ新たな目標や手立てを考えます。支援の最高の成果は、子どもの成長と笑顔です。常に自分の指導・支援を振り返り、不安を力に変えてください。



とれたて直送便



「気付きのアンテナ」

看護の基本は患者の観察にある。ここで気を付けなければならないのが、「見落とし」「見過ごし」「先入観」の3つ。見落としは、経験を積むことで克服できる。しかし、残る2つは培った経験があだになることも多い。例えば、患者の様子がいつもと違って、自分の経験に照らし合わせて「これくらいなら問題ない」と思い込み、危険を知らせるサインを見過ごしてしまう場合もある。どのように経験を重ねても、いつまでも新鮮な目で対象を見ることができるよう、日ごろから感受性を研ぎ澄まし、「気付き」のアンテナを高めることを意識的に行うことが大切である。～日本赤十字看護大学名誉教授：川嶋みどりさん～

常に自分自身をアップデートさせよう。生きることは、変化することである。